

被爆者が伝えたい思い

多摩市立鶴牧中学校 1年 西川 怜

私は、今回の多摩市子ども被爆地派遣事業のプログラムを通じて、被爆者の「後世に知ってほしい」という思いに正面から向き合い、多くのことを感じました。そういった被爆者の思いと私が感じたことをまとめました。

まずは、永井隆先生という方の思いです。永井先生は、日本の医学博士・随筆家で「長崎の鐘」や「この子を残して」など多くの作品を残した方です。原爆によって妻を亡くし、白血病と戦いながら死の直前まで原爆病の研究を発表し続けました。私は今回、永井先生の手記を原作にした作品の「この子を残して」を鑑賞しました。この作品は、戦争と原爆をあらわにしつつ、親と子の深い絆を描いた映画でした。最初は穏やかな日々を送っていた人たちが、最後の原爆投下後の映像に出てくるような残酷な状況を目の当たりにしながらも、それを乗り越えて生きてこられたのかと衝撃を受けました。

次に、丸木位里さんと丸木俊さんという夫妻です。夫妻は、原子爆弾が投下された直後の広島にいち早くかけつけ、原爆被害の報道規制が厳しい中「原爆の図」という連作を描き始めました。そして、日本全国をまわり、被爆の実情を広く伝えてきた方です。訪問した丸木美術館は、夫妻が共同制作「原爆の図」を誰でもいつでもここに来れば見ることができるようにという思いを込めて建てた美術館でした。私は「原爆の図」の第8部の「救出」に特に強い衝撃を受けました。この絵には、人間だけではなく犬も描かれていて、人間だけではなく生き物にも大きな影響があったことがよく伝わり、全ての生き物が被害にあっていたのだと感じました。一つの絵には、様々なシーンが描かれており、写真では表せないような迫力がありました。

私は、永井先生と丸木夫妻の思いにはある共通点があると思いました。永井先生は長崎で被爆をし、丸木夫妻は広島で被爆しました。違う場所での被爆ですが、同じ思いを持っていると感じました。それは「思い出したくない、でも後世に伝えたい」という思いです。そこに「大きな共通点」があると感じました。

現在日本人被爆者は約11万人いますが、時代が進むにつれ、被爆者の数は減ってきています。だからこそ、私たち若者は、戦争や原爆のことをもっと知り、次の世代にそのまた次の世代にとバトンを渡していかなければいけないと思います。「思い出したくないつらい記憶だが、二度と戦争を起こしてほしくないから伝えたい」という被爆者の思いを受け取り、受け継いでいかなければならないと思います。身近な人に伝える、多くの人に発信するなど、小さなことから私は始めていきます。

今、世界に目を向けると、想像もできないような争いがウクライナなど各地で起きています。「過去の戦争の過ち」を教訓に「世界の究極の平和」へとつないでいけるように私たちの世代も努力するべき時だと考えています。